

# 1/20 3/20 県立美術館で個展

**細** かいストロークで積み重ねられるわずか1mmにも満たないペンの線。1日で描けるのは、にぎりこぶしほどの面積だという。気が遠くなるような時間を糧に、やがて線は絡み合い、形を紡ぎ、物語がうねりだしていく……。佐賀県出身の画家・池田学さんの展覧会「池田学展 The Pen—凝縮の宇宙—」が1月20日から佐賀県立美術館で始まる。日本をはじめ、韓国、ドイツ、カナダ、アメリカ、ロシアなど

でグループ展に参加、2011年にはニューヨーク・タイムズ紙が選ぶその年に最もインパクトを与えた作品のひとつに選出されるなど、国際的に高い評価と注目を集めるアーティストだ。池田さんに独自の表現にたどり着くまでの道のりについて聞いた。

**自由な北高芸術コース**  
池田さんは1973年、多久市で生まれた。「身近に田んぼや森が



ある環境で育ったので、自然の中で遊ぶのが好きな子どもでした。同級生と虫取りをしたり、父親に魚釣りに連れていかけてもらったり。絵は家の中でやるのがなかったら描くといった感じでした」と池田さんは振り返る。中学生の頃、漠然と抱いていた将来の夢は、魚の研究に關する仕事に就くこと。「図鑑をまとめる仕事だったり、水槽の中でどう泳ぐか考えたり。そんなにリアルに考えてはいませんでした。画家になりたいと思ったことはありません。でも、中3のとき、美術の先生が佐賀北高芸術コースを勧めてくれました。絵で受験できる高校ができた、と聞いて楽しそうだな、と思い受験しました。」

佐賀北高校に芸術コースができたのは1988年。池田さんが入学

## 特集 表現の地平を拓く

### 画家・池田学さん

世界的に活躍する画家・池田学さんの初の大規模個展が1月20日から佐賀県立美術館で始まる。今回の特集では、池田さんを中心に、佐賀在住の写真家・大串祥子さんと陶芸家・山下寛兼さんを紹介する。独自の表現を切り拓くアーティストの姿勢から大きな刺激を受けよう。



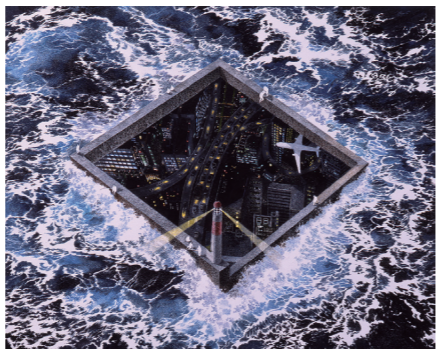




《カバ》2009 紙にペン、インク 21.2 × 27.5 cm  
 (公財) 東京動物園協会発行「どうぶつと動物園」掲載  
 ©IKEDA Marubyu Courtesy Mizuma Art Gallery



《ふたつの水園》2010 紙にペン、インク 22 × 27cm  
 Collection of Andrea Krantz and Harvey Sawikin  
 ©IKEDA Marubyu Courtesy Mizuma Art Gallery



《Gate》2010 紙にペン、インク 22 × 27cm  
 個人蔵 撮影：宮島桂  
 ©IKEDA Marubyu Courtesy Mizuma Art Gallery



《神山》2000 紙にペン、インク 51 × 61.4cm  
 宮本孝輝氏蔵 ©IKEDA Marubyu  
 Courtesy Mizuma Art Gallery



《予兆》2008 紙にペン、インク 190 × 340cm 撮影：久家晴秀 株式会社サステイナブル・インベスター所蔵 ©IKEDA Marubyu Courtesy Mizuma Art Gallery

# 少しずつ、でも常に変化

する1年前のことだった。「できたばかりのコースだったので、すごく自由な雰囲気がありました。合宿したり、なぜか犬を飼っていたり。担任の金子剛先生は厳しかったですが、型にはまらない面白い人でした。一般コースの生徒たちは、なぜ芸術コースだけ特別扱い?と、思っていたと思います。でも金子先生は構わずどんどん独自のカリキュラムを立ち上げていく。自分たちも一緒に新しい学校を作っているような気持ちでした」。

多久市から列車で約30分をかけて佐賀市へ通学。部活は美術部にしか入れない。美術漬けの毎日だった。「同級生の実家が南部パイバスのラーメン屋さんで、みんなよく行ってました。昼ごはんを食べながら、また美術室に戻って絵を描いて。3年間、同じメンバーだったし、男子は11人しかいなかったのが本当に気が知れた兄弟みたいな感じでした。縦のつながりも濃厚だった。「美術系の大学に入った先輩が、休みに帰ってきて、後輩の受験勉強につきあってくれました。福岡や東京での大学生活の話聞いて、すごく刺激を受けたのを覚えています」。東京芸術大学に挑戦することを決意した。

## 部活の毎日が糧に

「芸大入試の直前講習のため、高校の卒業式にも出られませんでした。そのまま東京の美術系予備校に通うことになり、それから合格するまで全く遊ばず、ずっと絵を描いていました。毎日絵を描いて、夕方に講評会。生徒全員の作品が順位をつけて並べる。「だんだん順位が上がっていくと、うまくなるのが実感できるし、達成感が味わえます。いろいろな挫折もありましたが、結果が形として見えるのが面白かったです」。2浪し、94年に芸大へ入学。「予備校時代の反動というか、合格してから抜け殻になってしまつて」。ほとんど学校にいかず、サッカー部と山岳部の活動に明け暮れる毎日だった。「サッカー部では試合の遠征に行ったり、山岳部では山で1カ月暮らしたり」。特に登山は、今につながるいろいろな刺激を与えてくれた。「都会にはない景色、奇景、面白い形の岩に出会ったり。いろんな山に行つて体験したことが今の制作の糧になっています。まじめに大学に通っていたらこういう絵にはならなかったでしょうね」。

画家・池田学の出発点は卒業制作で取り組んだ山の絵だ。「記憶の中に残るシー

ンをどうにか作品にしたいと考えました。ペンでアイデアスケッチを描いて、担当の先生に見せにいったら、このタッチで大きな画面を作ったら面白い、とアドバイスされました。ペンは身近な道具でしたが、下書きのためのものという感じで、そのまま作品になるとは思っていま

「予備校のときははやく、乾くまで待つていないといけなかったり、絵の具にコントロールされてしまっています。ペンは鉛筆がもっと固いものになったという感覚。道具に踊らされずに描くことができてきました。また一度描いた線は消せないというのも重要です」。思わぬことから誕生した独特の表現は高い評価を受けました。卒業制作で賞を獲得、ギャラリイからも声がかかり、いろんな発表の場が用意された。「本当にラッキーでした。画家になりたい、とかそこまで真面目に考えていませんでした。就職するつもりはなかったのですが、大学院の2年間で今後は考えようと思つていくくらいです」。

## 細部から全体が生まれる

池田さん独特の、全体像を固めず細部から描くというスタイルは昔からのもの

「予備校のときははやく、乾くまで待つていないといけなかったり、絵の具にコントロールされてしまっています。ペンは鉛筆がもっと固いものになったという感覚。道具に踊らされずに描くことができてきました。また一度描いた線は消せないというのも重要です」。思わぬことから誕生した独特の表現は高い評価を受けました。卒業制作で賞を獲得、ギャラリイからも声がかかり、いろんな発表の場が用意された。「本当にラッキーでした。画家になりたい、とかそこまで真面目に考えていませんでした。就職するつもりはなかったのですが、大学院の2年間で今後は考えようと思つていくくらいです」。

も、細部からの方が全体が描ける。一種の「特技」です。そういう風にしか描けないんです」。緻密なディテールだが、一般的な細密画とは大きく異なる。「細いペンの線を使うので、その形容されがちですが、細密画はタッチもみえないくらい精巧に描くのが目標。自分の場合はどっちかという雑。現実と同じ質感を出したい訳ではなく、細部の汚れやひび、表面の割れ目の中からチラッと見える細かいものを描いていくイメージです。こんなに時間がかかって大変な思いをして描く意味があるのか、と自問するときもあります。CGや映像なら、もったいなく自分がやりたいことを伝えられるかもしれない。でも、自分は自分の体を使つて描き続けることが好きなんです」。

アメリカ・ウィスコンシン州のチェゼン美術館の滞在制作プログラムで3年をかけて制作された巨大な新作「誕生」は細部から描くという方法でしか、辿り着けなかった到達点だ。東日本大震災をモチーフにした同作品。最初に描いたのは絵の下部に積み重なる瓦礫の山だ。少しずつペンを走らせるにつれて、大きな樹形が現れてくる。やがて避難テントは花びらになり、死者を弔う煙の先には、新しく生まれた生命が描かれていく。異国の地で聞いた母国の大災害。子どもが生まれたこと、利き腕の右手を負傷したこと。そして日々の生活。池田さんの体験が、積み重なることで物語が変化し、より広がっていく。佐賀での個展で日本初公開となる同作品について、池田さんは「震災が起きた日本で展示することで、どういう反応があるか。楽しみと同時に緊張しています」と語る。

## 世界から約120作品

同展では、国内外のコレクターや美術

館が所蔵する作品の数々が佐賀に集結する。池田作品のほぼすべてを網羅する約120点のほか、新作のスケッチや制作の記録も展示される。「県立美術館は高校の授業でよく通っていました。当時はこういうところで個展できるなんて思ってもみませんでした。高校生の自分に教えてあげたいですね。生まれ故郷でしかできない、特別な展覧会になるという楽しみがあります。ただ、細かい絵がたくさん並んだときにどう見えるのか。見る人が疲れちゃうんじゃないか、と心配しています」。

最後に池田さんに独自の表現をどうすれば手にすることができているか聞いてみた。「自分の場合は性格的にいろいろ器用のできるタイプではありませんでした。でも、他人にはあんまり変化がわからないかもしれないですが、自分の作品も卒業制作と最新作の間には新しい試みや発見の積み重ねがあります。ひとつのことを最低10年やってみて、少しずつ自分のスタイルが磨かれていく。そして第三者から「オリジナル」という評価を受けてはじめて独自の表現といえるのかもできません。ただ、同じシリーズだとしても、常に自分の中だけでもときどき緊張する一瞬がないと、続けることはできません」。

## 池田学展 The Pen —凝縮の宇宙—

1/20(金)～3/20(月・祝)

※毎週月曜日は休館(3/20は開館)  
 9:30～18:00  
 ※1/27(金)、2/17(金)、3/10日(金)は  
 ナイトミュージアムのため、20時まで開館。

当日券 …… 1,200円

※高校生以下無料  
 ※障害者手帳保持者とその介助者1名無料

「リピーター割」を実施!

会期中、受付で使用済の半券をご提示いただくと、割引料金1,000円でご観覧いただけます!



**軽** やかに跳び、語り合い、食べ、祈る。少年から老人まで少林寺で生活する僧侶たちの日々を等身大に描く。でも不思議とその神秘性は損なわれない。イギリスの名門パブリックスクールリートン校、ドイツ連邦軍の兵役、コロンビア軍麻薬撲滅部隊、近代五種、Men Behind the Scenes」というテーマで、壁の向こうにある男性社会を、独特の距離感で切り取ってきた佐賀在住の写真家・大串祥子さん。最新写真集「少林寺」では、中国を代表する古刹の武僧たちの日常を写真している。

## 新写真集「少林寺」出版 大串祥子さん

# 感情を呼び覚ます写真を

### 美少年への好奇心

美しい男性たちへの好奇心が、大串さんの人生を動かしてきた。「1985年、サッカーのトヨタカップに出場するため来日したイタリアのチーム・ユベントスに、それまで持っていたアスリートのイメージを覆させられました。こんなに綺麗な人たちがいるんだ、って。それで東京外国語大学のイタリア語学科に進みました」と大串さんは笑う。就職先はトヨタカップやW杯関連の仕事ができる電通へ。「国際スポーツの部署を希望したんですが、クリエイティブに配属となり、コピーライターやCMプランナーとして勤務していました。化粧品など、女性向けの商品を担当することが多く、美しい男性に接する機会は少なかつたです」。当時、イギリスの「マンチェスター・ユナイテッド」の雑誌を定期購読していた大串さんは、ひとりの選手に目を奪われる。



少林寺  
3,600円(税別)  
2月発行予定  
シアター CIEMAで先行発売中



甘露台の梅花粧の上で片足で立つ延次師傅



立雪亭裏に貼られた戒律の前に立つ耀禅法師

「まだあどけなさが残る頃のベツカムを見て、これだ!」と思い、有給休暇を取ってイギリスへ飛びました。ロンドンへの異動希望を出したんですが、通らなかつた。これは辞めるしかないな、となったんですが、観光ビザだと滞在期間が短いので、学生ビザを取りたい。それまでの仕事で身近だった写真で留学することを決めました。

### 3年、約10回通う

大串さんが新たな被写体として選んだのは「少林寺」だった。「今度はアジアで、と考えて、ブルース・リー、ジャッキー・

チェン、ジェット・リーといったカンフー映画で育った世代なので、その聖地である少林寺をテーマにしました」。取材許可を得るのは困難を極めた。「いろんなルートからアプローチしたんですが2回失敗。3度目に中国人の写真家の紹介で許可を得ることができました。まさに三顧の礼です」。取材期間は3年間、現地に渡ったのは約10回。「最長で1ヵ月滞在して撮影しました。最初は、彼らのありのままを撮影する私の撮影スタイルに対して 困惑されていたんですが、だんだん撮られていることが気にならなくなつたようでした」。

カンフーのイメージ通りの躍動感あふれる鍛錬の様子だけでなく、スマホを眺める少年僧や、窓辺で經典に視線を落とす僧侶、老僧の貫禄あふれる演武と生活空間……。世間から離れたところで営まれる日常を瑞々しく切り取っている。「まるで見たことがない世界の美と謎をそのままに撮る。分からないものは、分からないまま。分からないさが伝わればいいと思っています。被写体を解釈して表現するには違和感があります。謎があるから興味を持つ。恋愛と同じですね」。写真集は「日課」「演武」など、7章に分かれている。巻末には、詳細なキャプションが掲載されている。被写体の名前を省略することなく、同じ名前であっても繰り返し掲載する姿勢に、少林寺への深い敬意と愛情が滲み出ている。

最後に大串さんに自分の表現について聞いた。「解釈の幅があることが大事だと思います。隙間があるから、それを埋める遊びができる。そして最後は感情だと思っています。論理化できないところが表現の基本。自分の中に忘れていた感情が呼び覚まされるような、心のツボを押すような。誰もが理解できるもの、というより、誰かに深く届くものを作りたいですね」。

## 漆

黒の地肌に浮かぶクレタターが光を繊細に反射する。ハードな質感に漂う柔らかな詩情。久保田町の陶芸家・山下寛兼さんの作品「ムーンシリーズ」は、地球からは見ることができない月の裏側のように、手に取った人の想像力を優しくかきたてるディテールにあふれている。東京の有名スタイリストがプロデュースするセレクトショップで販売されるなど、その世界観が静かに評価されている。

### 模索する日々

山下さんは1973年、福岡市生まれ。同市内有数の進学校・福岡高校を卒業して武蔵野美術大学建築科へ進む。「工学系よりは向いているだろうと、消去法で選んだのが建築でした。でも建築はチームで仕事するのが前提。自分には合わないというのがだんだん分かってきました」と山下さんは振り返る。卒業後はアルバイトしながら模索する日々。「北海道で農業をしたこともあり。最初は北海道大学のキャンパスにテントを張って。その後、美幌町の農家に飛び込み、じやがいも



## 良いものより面白さ

### 陶芸家 山下寛兼さん

友人は1週間で帰ったんですが、自分は1ヵ月間働きました。子どもの相手をしたり、楽しかったです。その後、東京のデザイン制作会社で働く。「映像やグラフィックの仕事を担当しました。パソコンを使った作業が中心だったので、次第にこれじゃないなと

いう感覚が強くなってきました」。27歳で陶芸の道へ進む決断をする。「手を動かすものづくりの世界が気になり、焼き物を選びました。母親が陶磁器好きで、子どものころから親しんでいたというのも大きいです。いろんな産地や作家さんを巡り、福岡・糸島の横尾純さんの

所で修業しました。独特のテクスチャーが魅力的でした」。3年間、住み込みで働き、2004年、空き家になっていた久保田町にある母親の実家にアトリエを開設した。「最初は友人からの注文をこなしていましたが、それだけでは生活できないので、牛乳配達やパチンコ屋さんで働いていました」。06年には初めての個展を開催。現在では佐賀、福岡、大阪で毎年個展を開いている。

### 当初の想像を超える

山下さんの作風は常に変化する。初期の作品である「砂化粧」の平皿はざらついたテクスチャーが特徴的だが、絶妙な反りがある造形も印象深い。「板状の土を曲げて作ったように思われがちですが、実はひも状の土を縦に積み重ねて作りました」。面で作っても簡単に似たようなものが出来るだろうが、線で作ることにより理想の造形に近づける。繊細な造形感覚だ。

4年前から手がける「ムーンシリーズ」は常識を疑うことで出来た新しいテクスチャーだ。「既製品の釉薬をマニキュアにない温度で焼いてみたら、泡立ってしまった。以前、同じような失敗をしたとき、面白いテクスチャーになった記憶があったので、磨いてみたら魅力的な表現になりました。自分の考え方は天の邪鬼というか、人と違うことをしたがる気持ちが強いです。男性に人気のあるというのも納得な無骨な表面だが、繊細な立体感覚がスマートな印象を与える。日本を代表するスタイリストで写真家の熊谷隆志さんが評価するのも納得のバランス感覚だ。「良いものよりも面白いものを作りたいと思っています。最初のアイデアからどれだけはみ出すか。作りながら考えて、いろいろ変化していくと、当初の想像を超えるものができる。焼き物とは忍耐ですね」。今後は食器だけでなく、花器やインテリアなどに挑戦していきたいという。山下さんのハードだけどスマートフォン世界観が立ち上がった空間。できればバーや喫茶店。きつとカッコイイ大人が集まるんだろう。